

清末の出使日記と

その外交史研究における利用に関する一考察¹⁾

青山治世

I 清末出使日記の執筆と刊行

日記や遊記は中国の伝統文学の一ジャンルを形成しており、古来中国では多くの日記・遊記が執筆・刊行されてきた（陳左高，1990・2004，兪冰主編，2006）。前近代，中華王朝下の対外関係においても，皇帝や大官の命を奉じて藩属国を中心とした王朝の版図外に出使した官僚たちによって多くの遊記が執筆され，朝鮮や琉球，ベトナムに派遣された冊封使による使録は，すでに多くの研究で利用されている²⁾。それらの使録のほとんどが，帰国後に朝廷への復命報告書として提出されたものであり，文学的価値・地誌的価値のみならず，中国の対外関係史，東アジア国際政治史の研究上においても重要な史料となっている。

こうした「奉使日記」「星輶日記」の系譜³⁾は，アロー戦争（1856～60年）後に海外に派遣された清朝官僚の「出使日記」にも継承された。そのもっとも早いものが斌椿の『乗槎筆記』（1866年の斌椿使節団）や志剛の『初使泰西記』（1868～69年のバーリンゲーム使節団）であり，「対等」外交の状況下において清朝中国が初めて派遣した対外使節の記録として貴重

¹⁾ 筆者は現在，岡本隆司氏を研究代表者とする清末出使日記に関する研究に参加しており，岡本隆司（2008）はその成果をまとめたものである。本稿は，その一部を紹介するとともに，筆者なりの問題意識や関心も加え，清末出使日記の外交史研究における利用の現状と課題について整理を試みたものである。本稿で取り上げる出使日記の刊本や出使日記を採録した叢書などのうち，清末民初期に線装本として刊行されたものについては，行論の関係上，その書誌情報は本文や註の中に付記し，文末の参考文献一覧には挙げなかった。刊行年も中国暦（陰暦）と西暦（太陽暦）とでは月日にずれがあるため，正確を期して年号を用いた。

²⁾ 「使朝鮮録」「使琉球録」に関する近年における総合的研究には，夫馬進（1999），同（2003）がある。

³⁾ 義和団時期に駐独公使を務めた呂海寰は，古代以来の日記を含む「奉使」記録を編輯して『奉使金鑑』60巻，『補遺』不分巻，『統編』40巻（光緒31年～宣統元年刊本，五錫福寿堂蔵板）を刊行した。その「序」などを読むと，中国歴代の「奉使」のあり方や清末官僚の「奉使」「出使」に対する認識の一端が垣間見えてくる。

な史料となっている。また、1870年に発生した天津教案の結果、謝罪使としてフランスに派遣された崇厚も日記を記している（『崇厚使法日記』稿本、河北省図書館蔵、未見）。使節の代表以外にもその随員や通訳官による日記も残されており、そのもっとも有名なものが張德彝の『航海述奇』、『再述奇』、『三述奇』であろう⁴⁾。しかし、この段階での対外使節は臨時的な「出使」であり、その日記の政治外交上における価値も、かつての「遊記」や「使録」の範囲を出るものではなかった。

いわゆる「常駐外交使節」(the permanent diplomatic service)が清朝において導入されるのは1870年代後半になってからのことであり、1876年に派遣された駐英公使の郭嵩燾をはじめ、1877年には駐日公使の何如璋が、1878年には駐アメリカ・スペイン・ペルー公使の陳蘭彬がそれぞれ派遣されたが、彼らもみな日記を記していた（郭嵩燾『使西紀程』、何如璋『使東述略』、陳蘭彬『使美記略』）。在外公使（出使大臣）による日記の執筆とその総理衙門への提出は、在外公使の海外派遣開始後に総理衙門の提起によってなかば「義務」化されたものであった。1877年12月の総理衙門の上奏には次のように記されている。

臣等査するに、外洋各国の虚実一切は、惟だ出使せし者のみ、^{みづか}親ら其の地を歴し、始めて之を書^{しる}に筆すこと能わん。況や日記なるものは並して一定の体裁無く、此等の事件を辦理し、自ずから当に心を尽くし力を竭くして、以て益を国に有らしめんことを期すべし。倘し一概にして隠して宣^のべざれば、窃かに恐る中外の情形永遠に隔闕し、而して出使の職も亦た虚設と同じとならんことを。東(日本)・西洋の出使各国大臣(在外公使)に筋下すべきや否や、務めて大小の事件を逐日詳細に登記し、仍お月に按じて一冊に彙成して、臣衙門(総理衙門)に咨送せしめ、案に備えて査核し、即し外洋の書籍・新聞紙等の件を繙訳し、内に交渉事宜に關繫する者有らば、亦た即ち一つに併せて隨時咨送せしめ、以て考証に資させしむるを(「総理衙門片奏」光緒3年11月1日、『奏定出使章程』上巻、p.3;張寿鏞等,1903,「外編」巻18,p.8ほか)。

その後派遣された在外公使の多くも日記を記し、帰国後あるいは在任中に中国国内で刊行され、現在われわれが目にすることができるものも多い。以下はその一覧である。

郭嵩燾『使西紀程』(光緒間刻本⁵⁾、『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙)⁶⁾

劉錫鴻『英輶日記』(光緒間鉛印本・袖印石印本⁷⁾、『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙)⁸⁾

⁴⁾ 『航海述奇』は、『申報館叢書』本(光緒間上海申報館刊)が刊行されているほか、王錫祺輯『小方壺齋輿地叢鈔』(光緒17年序上海著易堂石印)第11帙にも収録されている。また『航海述奇』から『八述奇』までの稿本(『七述奇』を除く)が北京の国家図書館に保存されており、その影印版(張德彝,1997)がすでに出版されている。『七述奇』は、義和団事変後の対日謝罪使(正使は那桐)の参贊官として随行した際の日記であり、その稿本が中国歴史博物館に保管されており、趙金敏(1985)に標点付きで掲載されている。その他、崇厚の対仏謝罪使の随員であった高從望が記した『隨輶筆記』(未見)も南京図書館に保存されている。これを紹介したものに江慶柏(2002)、李長林(2003)がある。

陳蘭彬『使美記略』（光緒間排印本）

曾紀沢『曾侯日記』（尊聞閣主人編『申報館叢書餘集』光緒7年申報館排印本）⁹⁾

〔曾紀沢〕『金輶籌筆』（『挹秀山房叢書』光緒9・10・13年挹秀山房刻本）・『中俄交涉記』（光緒22年積山書局石印本）¹⁰⁾

李鳳苞『使德日記』（江標輯『靈鶴閣叢書』光緒23年元和江標湖南使院刊本）¹¹⁾

劉瑞芬『西輶紀略』（『養雲山莊遺稿』光緒19・22年刊本所収）

⁵⁾ 光緒3年に総理衙門が郭嵩燾に無断で刊行し、郭嵩燾の弾劾事件を招いた。また、『万国公報』第441巻（1877年6月2日）・第444巻（6月23日）～第450巻（8月4日）にも連載されている。

⁶⁾ その他、同康廬編『中外地輿図説集成』本（光緒20年上海積山書局石印）、王西清・盧梯青編『西学大成』本（光緒21年上海醉六堂書坊石印）、佚名輯『遊記彙刊』本（光緒23年湖南新学書局刻）がある。

⁷⁾ 未見。朱維錚（1996）p. 159による。郭嵩燾はパリでドイツ駐清公使のプラントと会見した際に、劉錫鴻のイギリス滞在中の日記が総理衙門によって刊行され、「朝廷の大官」らに配布されて、自らも入手して読んだことを聞かされている（郭嵩燾，1982，光緒4年8月27日（1878年9月23日）条，第3巻 pp. 637-638）。当時北京にいた曾紀沢は，光緒4年3月20日（1878年4月22日），8月7日（9月3日），同12日（同8日）に劉錫鴻の日記を読んだと自らの日記に記している（曾紀沢，1998，p. 737，pp. 768-769）。翁同龢も劉錫鴻の日記を摘録しているが（翁万戈，2003，pp. 2-24），これもこの時総理衙門から配布された日記を摘録したものかもしれない。このように，総理衙門によって刊行された劉錫鴻の『英輶日記』は，少なくとも1878年夏までには，清朝の高官や外国公使など一部の外交関係者を中心に，限られた範囲内とはいえ，かなり読まれていたことが伺われる。

⁸⁾ その他、『英輶私記』と改題した日記の体裁をとらないダイジェスト版が江標輯『靈鶴閣叢書』（光緒21年元和江標湖南使院刊）に収録されている。このあたりの事情は岡本隆司（2008）第1章「清末出使日記と在外公館」を参照。

⁹⁾ 他に万選楼主人輯『各国日記彙編』（光緒22年上海書局石印）にも収録されている。また、『出使英法日記』と改題して『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙と『遊記彙刊』にも収録されている。その他，8年にわたる曾紀沢の出使期間を網羅した『曾惠敏公使西日記』（『曾惠敏公遺集』光緒19年江南製造總局鉛印所収。後半部分はダイジェストになっている）があり，王錫祺輯『小方壺齋輿地叢鈔再補編』（光緒23年序上海著易堂石印）第11帙にも収録されている。これらの曾紀沢の日記や後掲の『金輶籌筆』（「問答節略」）は，総理衙門に提出するなどの目的を持って「出使日記」として編集されたものである。曾紀沢にはこれとは別に，彼個人の手写日記があり，影印出版（曾紀沢，1965）されている。これを底本とし『曾侯日記』との対校も行い，『曾侯日記』にしか記載のない部分を加えて標点出版されたのが曾紀沢（1998）である。これら曾紀沢の出使日記の成立過程や各版本の比較・校合については，別稿「曾紀沢の出使日記について」（未定稿）において詳述する予定である。

¹⁰⁾ 『中俄交涉記』は巻頭に楊楷の序があることを除き，『金輶籌筆』とほぼ同内容である。『金輶籌筆』は，後に『小方壺齋輿地叢鈔』第3帙と『遊記彙刊』にも収録されている。これらの版本には撰者名は記されておらず，『挹秀山房叢書』本・『小方壺齋輿地叢鈔』本・『遊記彙刊』本では，「闕名」「佚名」とされている。また，『金輶籌筆』とその元となった「問答節略」の実際の著録者が，翻訳官の慶常であったことは，曾紀沢の手稿日記の記述から知られる（曾紀沢，1998，p. 1021，p. 1029，p. 1037）。

張蔭桓『三洲日記』（光緒 22 年〔北京〕粵東新館刻本，光緒 32 年上海石印本）¹²⁾

薛福成『出使英法義比四国日記』（光緒 18 年無錫薛氏刻本、『小方壺齋輿地叢鈔』第 11 帙）¹³⁾

薛福成『出使日記續刻』（光緒 23 年無錫伝経楼家刻本）¹⁴⁾

崔国因『出使美日秘国日記』（光緒 20 年鉛印本）

黄誥『義輶紀程』（鉛印本）

「出使章程」によってなかば「義務」化されたとはいえ、その後もすべての在外公使が出使日記を執筆・提出していたわけではない。この規定はいわば「努力目標」に近く、実際には、公使に任命された官僚個人の裁量に委ねられていたようである¹⁵⁾。また、義和団事変（1900 年）後の光緒新政期に派遣された駐英公使張德彝の『八述奇』（稿本）や駐イタリア公使黄誥の『義輶紀程』（鉛印本）、駐オランダ公使錢恂の「日記」（中国社会科学院近代史研究所蔵）という一部の例外を除き、日清戦争以後は在外公使による出使日記の執筆自体、管見の限りでは行われなくなったようである。提出や刊行を想定していない個人の日記を執筆していた公使はいたであろうが、「出使日記」として執筆・編集されたものは、現在のところ上記の 3 点しか見当たらない。そのうち、張德彝の『八述奇』は稿本であり、張德彝（1997）として影印出版されるまでは公刊されておらず、錢恂の「日記」も公使館内部の事務的な執務日誌であり、公開・刊行された形跡はない。つまり、日清戦争後に派遣された在外公使の日記のうち、出使日記として執筆・編集・出版されたものは黄誥の『義輶紀程』のみであった。

既存の出使日記の刊行も、日清戦争前後から戊戌変法（1898 年）時期をピークに、次第に減少していく。こうした状況を思潮面から説明すれば、1870 年代後半から 19 世紀末に見られた出使日記の執筆と刊行は、いわば、清末の官僚・知識人層の対外的関心や自己変革への欲求、あるいは中国の存亡を賭けた富強への渴望（いわゆる「自強図存」）を動因とした、

¹¹⁾ その他『遊記集刊』本がある。また『小方壺齋輿地叢鈔』第 11 帙にも収録されているが、日記体ではなくその他の版本と内容も異なる。この点については岡本隆司（2008）第 1 章「清末出使日記と在外公館」を参照。

¹²⁾ 刊行された『三洲日記』と帰国後に光緒帝に上呈された「奉使日記」との内容に違いがあることを、張蔭桓自身が『三洲日記』の跋文に記している。奉呈本の稿本（『奉使日記』16 卷，未見）が上海図書館に所蔵されている。また、『奉使日記』（不分卷，鉄画楼鈔本，未見）が南京図書館に所蔵されている（張蔭桓，1999，王貴忱「後記」p. 266；同，2004，「前言」p. 2 を参照）。

¹³⁾ その他，光緒 18 年上海鴻宝齋石印・醉六堂發兌本，光緒 18 年吳俊書齋石印本，光緒 20 年孫谿朱氏校・校経堂刻本，光緒 22 年上海図書館集成印書局鉛印本，光緒 23 年望龍學社刻本，光緒 23 年成都志古堂刻本，『庸齋全集』（光緒 24 年涵芬樓刊）所収本など多くの版本がある。薛福成の著述版本については，黄樹生（2005）を参照。

¹⁴⁾ その他，『庸齋全集』（光緒 24 年涵芬樓刊）所収本，光緒 27 年重校石印本がある。

¹⁵⁾ この点についても，前述した別稿「曾紀沢の出使日記について」（未定稿）において，曾紀沢を例に論ずることとしたい。

洋務から変法への過渡期における一つの思潮現象であったということができよう¹⁶⁾。また、実務的な面では、1895(光緒21)年に提出された御史陳其璋の次の上奏文からその一端を伺うことができる。

使臣は宜しく交渉事件及び各国情形を隨時奏報すべきなり。向來使臣は任満ちて京にかえ回らば、必ず日記を總理衙門に送呈し藉りて考証に資する有り。其れ洋に駐するの時、亦た交渉事件及び各国情形を月に按じて総署に函告す。聞くに近來は惟だ駐俄使臣許景澄のみ尚お隨時函報するという。駐美使臣楊儒は毎年報を成すこと一二次。独り駐英法使臣龔照璠のみ則ちかつ從て未だ片牘の來告する者すら有らず、此くのごとき廢弛因循は殊に遣使の本意に非ざるに似たり(劉錦藻, 1905, 卷339「外交」3, 考 pp. 10804-10805)¹⁷⁾。

つまり、在外公使の外交活動の恒常化に伴い、一般的な報告書の定期的な提出によって、出使日記の執筆と提出は「義務」とは見なされなくなっており、その定期報告の提出すら疎かになっていることに陳其璋は批判を加えたのである。それとは反対に、執筆・提出・刊行が続けられていくのが、臨時の使節や視察団による「出使日記」である。1902年にイギリス国王エドワード7世の戴冠慶賀使として派遣された載振とその参贊唐文治による『英輦日記』(光緒29年上海文明書局鉛印)や、1905~06年に出洋考察憲政大臣として欧米諸国や日本に派遣された戴鴻慈の『出使九国日記』(光緒32年北京第一書局鉛印)、載沢の『考察政治日記』(宣統元年上海商務印書館鉛印)などがそれである。こうした推移を考え合わせると、1870年代後半~90年代末までに見られた在外公使による出使日記の執筆と刊行は、在外公使の派遣開始から変法運動が高揚する時期に見られた特有の現象であったといえよう。

II 清末出使日記の外交史研究への利用

前章では、公使の日記を中心に、その執筆と刊行の経過を簡単にたどってみたが、清末の出使日記には、それ以外にも多種多様なものが存在する。それは大きく分けて、狭義のものと広義のものに分類することができる。狭義の出使日記とは、初期の常駐在外公使に義務づけられた總理衙門に対する報告・復命の一形態としての日記であり、広義の出使日記とは、在外公使館の参贊(書記官)・随員、特別使節あるいは視察使として外国に派遣

¹⁶⁾ こうした視点については、岡本隆司(2008)第1章「清末出使日記と在外公館」がさらに行き届いた分析・考察を行っているので参照されたい。

¹⁷⁾ この上奏は、在外公館制度の運用の改善を訴えたものであるが、陳其璋は同(光緒21)年12月には、同文館改革についても上奏文を提出している(中国第一歴史檔案館編, 1996, 21, pp. 498-499, No.1412・1415)。

された者やその随員による日記である。

こうした在外公館の参贊・随員・翻訳官によって執筆され、その後刊行された日記は多数にのぼり、それは公使による出使日記の数を優に超えている。参贊・随員の日記は、基本的には総理衙門などへの提出を前提として書かれたものではなく、通常は個人または同僚間における執務記録、あるいは紀行文や知識人としての嗜みとして記されたものとみなしてよいだろう。ただ、これが出版されるに至る背景には、印刷・販売する書肆からすれば、外国知識を渴望する中国国内の知識人層の需要に応える目的があったであろうし、日記を編輯者や出版元に提供する側からすれば、外国知識の普及やその中国への導入を促そうとするねらい、あるいは撰者本人が日記を提供する場合は、自らの外国知識を国内の官界や知識人層に対して宣伝しようとするねらいもあったであろう¹⁸⁾。また、広義の出使日記には、「出使」という状況下であることを意識して執筆されながら、その後清末民初の時期に刊行の機会を得なかった少なからぬ日記も含めてよいであろう。

以上、広義の出使日記のうち現在確認できるものは、参贊・随員・翻訳官の日記が 15 種、特使・視察使の日記が 37 種、特使・視察使の随員の日記が 10 種である。以下、その撰者名と書名のみ挙げておきたい¹⁹⁾。

〈在外公館の参贊・随員・翻訳官の日記〉²⁰⁾

• 駐英公使館

黎庶昌『奉使倫敦記』・「西洋遊記」	吳宗濂『隨輶筆記』
張德彝『隨使日記』(四述奇)	陳春瀛『回颿日記』
鄒代鈞『西征紀程』	張德彝『六述奇』
余思詒『樓船日記』(航海瑣記)	

• 駐露公使館

張德彝『使俄日記』・『使還日記』(四述奇)

• 駐独公使館

徐建寅『欧遊雜錄』(西遊日記)	王詠霓『道西齋日記』(帰国日記)
錢德培『欧遊隨筆』	張德彝『五述奇』

• 駐アメリカ・スペイン・ペルー公使館

¹⁸⁾ ただ日記の提供者は、撰者が存命中であっても、必ずしも撰者本人、あるいはその意を受けた者であったとは限らない。たとえば、駐英公使曾紀沢の『曾侯日記』や『金輶籌筆』は、本人の同意を得ずに刊行され、後日それを知った曾紀沢は不快感を露にしている(『曾思敏公電稿』, 2005, pp. 34-35; 曾紀沢, 1998, p. 1545)。

¹⁹⁾ それぞれの出使目的、収録期間、各種版本の書誌情報などについては、岡本隆司(2008)第3章「清末出使日記リスト—総理衙門時期を中心に」(筆者作成)に詳記した。併せて参照されたい。

²⁰⁾ 余思詒や陳春瀛の日記など、在外公館での執務以外の任務が記述のメインとなっている日記も、便宜上撰者が所属する公使館に分類した。

蔡鈞『出洋瑣記』

〈特使・視察使の日記〉

斌椿『乘槎筆記』(乗査筆記)

志剛『初使泰西記』

孫家穀『使西書略』

崇厚『崇厚使法日記』

祁兆熙『遊美洲日記』

王承榮『遊歷記』

李圭『環遊地球新録』

陳季同『西行日記』(未見)

黃楸材『西轡日記』

王之春『談瀛録』(「東遊日記」)

池仲祐『西行日記』

袁大化『東遊日記』(東遊俄邊日記)

馬建忠『南行記』

吳広需『南行日記』

馬建忠『東行初録』・『東行統録』・『東行三録』

鄭觀応『南遊日記』

吳大澂『皇華紀程』

〈特使・視察使の随員の日記〉

張德彝『航海述奇』

張德彝『再述奇』

高從望『隨軺筆記』

張德彝『三述奇』(随使法国記)

劉文鳳『東陞紀行』

傅雲龍『遊歷凶経餘紀』

繆祐孫『俄遊日記』

崇礼『奉使朝鮮日記』

鳳凌『四国遊紀』・『遊餘僅志』

黃慶澄『東遊日記』

聶士成『東遊紀程』

王之春『使俄草』(使俄日記)

張蔭桓「英軺日記」(未見)

李家駒「東行雜録」

朱綬『東遊紀程』

李樹棠『東徼紀行』

劉学詢『遊歷日本考查商務日記』

沈翊清『東遊日記』

丁鴻臣『東瀛閱操日記』・『遊歷日本視

察兵制学制日記』

醇親王載灃『醇親王使德日記』

那桐「東使日記」

楊宜治『俄程日記』

張德彝「七述奇」

唐文治「奉使日本記」(代筆)

蔡琦『随使筆記』

清末の出使日記は、現在まで、思想史研究・文化交流史研究・外交史研究など各分野において利用されてきたが、思想史研究・文化交流史研究における利用がその大半であり、それも個人の外国体験や思想変容を究明することに重点があったように思われる²¹⁾。特に中国大陸においては、1970年代末の改革・開放政策開始後の「走向世界」潮流に合わせて、近代中国人の「世界観」「西洋観」の再検討が行われてきた²²⁾。その反面、対外関係の

²¹⁾ 中国では朱維錚(1996)や王曉秋(2005)、日本では坂野正高(1982)、溝口雄三(1989)、手代木有児(1998~1999・2002)などの研究成果がある。

²²⁾ そのうち、もっとも著名なものが『走向世界叢書』(1980-82年湖南人民出版社版、1984-86年岳麓書社版)の刊行とその主編者である鍾叔河氏による研究である。鍾叔河(2002)を参照。

処理が本来の任務である外交官僚の日記であるにもかかわらず、出使日記の外交史研究における利用はそれほど積極的には行われず、一つ一つの出使日記に対する外交史上の位置づけや再検討はなおざりにされてきた²³⁾。ましてアロー戦争後の清朝中国による西洋近代外交制度の漸進的な導入、とりわけ1870年代後半の在外公館の設置開始以降の清末外交官の実相、清末外政機構の全体像の解明における出使日記の利用などは、まだ緒に就いたばかりである²⁴⁾。つまり、個人の日記としてではなく、外政機関の執務日誌として出使日記を捉え直すことが必要なのである。たとえば、出使日記の系統的な利用が、李鴻章や総理衙門（あるいは清朝全体）による外交活動や政策決定過程の一端を解明する手がかりともなるであろうし、また、出使日記を読み通してみると、清末外交官の外交活動において必要な情報源が、各公使館の保存記録（旧巻）や上海から送られてくる『申報』、あるいは現地の外国新聞などに拠っていたこともわかってくる。その他、駐在国政府との外交交渉の状況のみならず、本国の外政機関である総理衙門や北洋大臣（李鴻章）あるいは他の在外公使との文書の往来、部下である分館職員や領事などからの報告の状況なども、出使日記からある程度つかむことが可能である。

しかし、外交史研究の史料として出使日記を利用する場合には、注意すべき点も多い。現存する出使日記のほとんどは「原史料」ではなく、その記載内容は、最初の執筆時から稿本の完成、印刷・出版に至るまでの過程で、二重三重に手が加えられたものであり、外交史料としては一義的には使えない側面もある。しかし、外交官僚の日々の活動を知るためには、出使日記に勝る史料はほかになく、注意を払いながら使わざるを得ないのが実状である。では、いかに注意を払いながら利用するのか。そのもっとも基本的な方法は、編纂史料²⁵⁾、外交檔案²⁶⁾、外国側の史料²⁷⁾との照合作業である。出使日記に記載されている内容を、可能な限り他の内外の史料と比較照合することが出使日記の外交史研究における利用には不可欠の作業となる。また、皇帝への「奉呈本」や個人の稿本が残っている出

²³⁾ 李恩涵（1966）や坂野正高（1985）などは、出使日記を外交史研究として利用した先駆的な研究成果であるが、その後そうした手法を踏襲した研究は続かなかつた。1887年に派遣された遊歴官の研究としては、佐々木揚（2000）第3章、王曉秋・楊紀国（2004）がある。また、総論としては、楊易（1996）があり、清末の出使日記に関する基本的な変遷過程や時代背景を知ることができる。

²⁴⁾ 岡本隆司（2004）・（2006）・（2007）など氏の近年の研究は、その最も顕著な成果である。梁碧瑩（2004）は、駐米公使を対象とした清末在外公使に関する近年における優れた実証研究の一つであるが、出使日記の再検討とその全面的な利用は行われていない。

²⁵⁾ 『清季外交史料』・李鴻章『李文忠公全集』・張之洞『張文襄公全集』などの本国政府や地方大官の史料、曾紀沢『曾憲敏公遺集』・薛福成『庸盦全集』などの外交官僚の個人の全集などである。編纂史料の利用にあたっては、編纂の時代背景や編纂者によるバイアスなどに注意して使用することは当然であり、すでに刊行されている編纂史料を確認しないまま、利用しやすくなった檔案史料にのみ依拠して研究を進めることもまた別の危険をはらんでいる。

使日記の場合も、それらと刊行本との校合作業も必要となってくる。それ以外にも、基本的な問題として、公使・随員・特使のすべてが日記を書いているわけではない以上、元々日記を執筆している者とそうでない者との分別を行い、未発見の史料の発掘を進めていくことも必要である。

次に、出使日記の利用とその注意点について、薛福成『出使英法義比四国日記』と同『出使日記続刻』を使ってその具体例を提示してみたい。

まず1つめの事例は、『出使英法義比四国日記』光緒16年8月13日(1890年9月29日)条に収録されている、駐英公使薛福成がイギリス外務省に送付した清朝領事館の設置に関する照会である。これは、同じく薛福成の駐英公使時代の関係文書を集めた『出使公牘』に収録されている「与英外部商設英属各埠領事」と題した照会(薛福成, 1898, 『出使公牘』巻8, pp. 1-2), およびイギリス外務省史料(FO17/1104, Sieh Ta-jên to Salisbury, Sep. 25, 1890)に収録されている照会の漢文原本と同一内容の照会文ではあるが、字句の出入りが非常に多い。この3種の照会文を校合してみると²⁸⁾、次のようなことがわかる。

薛福成がイギリス外務省に実際に送付した照会が、イギリス外務省史料(FO17/1104)に収められているものであることに間違いはないであろう。しかし、薛福成の外交活動を分析した既存の研究では、彼がイギリス外務省に送った照会などを引用する際、『出使英法義比四国日記』(以下『日記』)・『出使日記続刻』や『出使公牘』(以下『公牘』)から引用している場合がほとんどである(丁鳳麟, 1998, pp226-227など)。前述したように実際に送付された照会文と『日記』に収録されている照会文とは字句に多くの出入りがあり、しかも、『日記』の照会文と『公牘』の照会文との間にも少なからぬ出入りがある。『日記』の照会文は『公牘』の照会文と比べてFOのものに近いといえるが、しかし、『公牘』の照会文の一部は、『日記』の照会文にはないがFOの照会文の中には記載されている字句もある。つまり、『日記』の照会と『公牘』の照会は、ともに薛福成がイギリス外務省に実際に送付した照

²⁶⁾ 北京や台北に保存されている「総理衙門檔案」「外務部檔案」などがそれに当たる。台北の中央研究院近代史研究所に保存されている外交檔案は、1960年代以降順次影印出版が進んでおり、現在ではインターネットで一部が閲覧できるようになっている。北京の中国第一歴史檔案館や国家図書館分館に保存されている外交檔案も、近年続々と影印出版され利用しやすくなっている(中国第一歴史檔案館編『清代中国与東南亜各国関係檔案史料彙編』, 同編『清代外務部中外関係檔案史料叢編』, 『国家図書館蔵清代外交孤本檔案』・同『続編』など)。しかし、第一歴史檔案館所蔵の「外務部檔案」は、そうした整理・出版の影響もあり、2007年秋現在すべて閲覧できなくなっている。また、北京の中国社会科学院近代史研究所にも、官僚個人がもともと保管していた文書を中心に、多くの未刊行檔案が保存されている。

²⁷⁾ 欧米・日本やその植民地の外交記録や公文書、個人の史料や日記、新聞・雑誌などである。

²⁸⁾ 詳細な対校結果は、岡本隆司(2008)第2章「清末出使日記解題」(岡本隆司・青山治世) pp. 39-41を参照。

会の草稿であり、その上、ともに最終的な照会文に採用された部分を含んでいるため、この照会の作成順序を『公牘』→『日記』→FO と見ることはできないのである。

『日記』やFOの関連史料を見てみると、この照会文の作成過程や送付日が、次のようであったことがわかる。まず薛福成は、1890年9月25日にマカートニー（Halliday Macartney, 駐英公使館英文参贊²⁹⁾）に先に英文照会を作らせ（『日記』光緒16年8月12日条）、翌26日にそれを張斯恂（駐英公使館随員）に漢文に翻訳させ、その日のうちに一緒にイギリス外務省に送付させている（同13日条）。こうした手順をみれば、先に作成されたマカートニーの英文照会が25日付（FO所収の英文テキストも作成日は25日となっている；FO17/1104, Sieh Ta-jên to Salisbury, Sep. 25, 1890, received September 26）、翌日張斯恂に翻訳させた漢文照会が26日（光緒16年8月13日）付となっていることも納得がいくし、英文テキストが26日に送付されたために、FO所収の英文テキストにイギリス側によって「9月26日受理」と付記されていることも納得がいく³⁰⁾。

『日記』光緒16年8月13日（9月26日）条には、英文照会を張斯恂に翻訳させ漢文照会を作らせて、マカートニーに託してイギリス側に送付したという記述につづいて、次のように記されている。

中国（語）と西洋（言語）の文法は往々にして異なるところがある。中国文は簡明だが、彼ら（の文章）はまったくもって煩雑だ。その上前後倒置の句法が多く、そうしなければ読む者がかえって意味がわからなくなるという。ここに特にこれを収録する。その（漢文訳の）文法の多くはすでに翻訳者（張斯恂）による削除や潤色を経ているとはいえ、外国の公文書（「外洋公牘」）の様式を少しは表しているだろう（薛福成, 1985, p. 215；同, 2004, pp. 575-576）。

そして、それにつづけて先の漢文照会の全文が引用されている。以上のような照会の作成過程を考えると、FO・『日記』・『公牘』の漢文テキストにそれぞれ字句の出入りがある事情も理解できる。そして、英文テキストが先に作られイギリス側に送付されたということであれば、漢文テキストと英文テキストとの照合も当然必要となってこよう³¹⁾。

以上の事例は、清末の外交官僚の日記やその他の史料に収録されている外交文書が、決して実際にやり取りされた文書ではないということを示しており、外交史研究においてこれらの史料を使用する際は、十分注意する必要があることを示している。

2つめの事例は、同じく薛福成の『出使日記続刻』光緒19年8月3日（1893年9月2日）

²⁹⁾ 初代駐英公使の郭嵩燾以来、駐英公使館の英文参贊を務めている。マカートニーの事蹟については、Boulger（1908）を参照。

³⁰⁾ FOに漢文テキストが残されている以上、漢文照会もイギリス側に提出されたことは間違いないが、『日記』光緒16年8月13日条には、英文照会がマカートニーによって手渡されたと書かれているのみで、漢文照会がいつ送付されたかについては記述がない。

条に記載されている、歴代の清朝の在外公使に対する薛福成による功績ランキングとコメントを記した部分である。このランキングの第10位以下の姓名は、刊本の『出使日記続刻』では、張蔭桓を除いてみな伏せ字（「□」）になっている。このような処置は、おそらく薛福成の死後に『出使日記続刻』を編集出版した息子の薛慈明（瑩中）らによるものと思われる。しかし、現在手稿本を底本とし刊本の出使日記とも対校を行った薛福成（2004）が出版されており、伏せ字になっていた人名もすでに明らかになっている（薛福成，2004，p. 826）³²⁾。このように、手稿本もしくはそれを底本とした活字本の刊行が進んでいる現在、清末期に刊行された出使日記と、その元となった日記稿本との照合も欠かせない作業の一つである。

III 清末出使日記をめぐる史料状況の変遷

すでに述べてきたように、現存している清末出使日記には、稿本・奉呈本・刊行本など様々な形態があり、刊行本にも多くの版本がある。ここでは、そうした出使日記をめぐる史料状況の変遷を、刊行本を中心に確認しておきたい。

出使日記の出版形態は多種多様であり、まず個別の出版物として刊行されたものとしては、曾紀沢『金輶籌筆』（『挹秀山房叢書』光緒9年挹秀山房刻本）のように故郷の書肆により出版された叢書に輯録され刊行されたもの³³⁾、薛福成『出使英法義比四国日記』『出使日記続刻』、王之春『談瀛録』（光緒6年清泉王之春刻本，光緒6年上海文藝齋刊本）のように家刻本として刊行され、その後上海などの書肆から石印本・鉛印本として出版されたもの、張徳彝『航海述奇』（『申報館叢書』光緒間申報館刊本）や曾紀沢『曾侯日記』（『申報館叢書餘集』光緒7年申報館鉛印本）のように上海申報館刊行の叢書に輯録され刊行されたもの、張徳彝『四述奇』（光緒9年序同文館刊本）のように総理衙門所属の北京の同文館から刊行されたもの、劉瑞芬『西輶紀略』（『養雲山莊遺稿』光緒19年・22年刊本）、黃楸材『西輶日記』（『得一

³¹⁾ 先に英文テキストが作成される照会の形式は、薛福成の在任期間では、この領事増設要求の照会がおそらく最初のものであったと思われる。『公牘』巻8の「洋文照会」という項目に収められている照会の第一番目に当たるのがこの照会であるうえ、先に引用した「中国（語）と西洋（言語）の文法は…」とのくだりも、この照会に関連して書かれているからである。この「洋文照会」というものの駐英公使館の対英交渉における意義と作用、そしてその原文をほぼ一手に作成していたと思われる駐英参贊マカートニーの清朝の対英外交における役割や影響についても、再検討していく必要があるだろう。

³²⁾ これについては薛福成（2004）「前言」p. 4にも言及されている。薛福成日記の刊本と稿本との校合作業については、同「前言」を参照。

³³⁾ 前述のとおり、これは本人の同意を得ずに、甥の曾広鈞が勝手に刊行してしまったものようである（曾紀沢，1998，p. 1545）。

齋雜著』光緒12年新陽趙氏夢花軒刻本), 曾紀沢『曾惠敏公使西日記』(『曾惠敏公遺集』光緒19年江南製造総局鉛印本), 馬建忠『南行記』『東行三録』(『適可齋記行』光緒22年南徐馬氏木刻本)のように, 個人の文集・遺稿集に輯録され刊行されたもの, などがある。また, 薛福成『出使英法義比四国日記』のように, 撰者が生前に自らが関係して刊行したものと, 同じく薛福成の『出使日記続刻』のように, 撰者の死後にその子弟らによって刊行されたものとの分けることができ, それぞれ刊行の意図や背景には違いがある³⁴⁾。

個別の出版物として刊行された日記以外には, 特定の目的をもって編纂刊行された叢書に輯録されたものがあり, これまでの研究において利用されてきた出使日記の大半が, そうした叢書に輯録されたものである。そのうち最も注目すべきものが, 王錫祺輯『小方壺齋輿地叢鈔』(光緒17年序上海著易堂石印), 同『補編』(光緒20年序上海著易堂石印), 同『再補編』(光緒23年序上海著易堂石印)の刊行であろう³⁵⁾。『小方壺齋輿地叢鈔』は19世紀末に刊行された著名な地理叢書で, 内外の地理文献や遊記などが大量に収録されており, これほど多くの海外に関する地誌や遊記が収録された叢書の刊行は中国の有史以来初めてのことであり, まさに19世紀末の「走向世界」思潮, 具体的には1880年代以降の激変する中国をめぐる国際環境と, それに対する清末知識人の関心の高さを反映した編纂事業であったといえよう。『小方壺齋輿地叢鈔』以外にも, 日清戦争前後から戊戌変法の時期にかけては, 当時の改革思潮の興起にともない, ささまざまな叢書が編纂・刊行された。それらには次のようなものがある。

『中外地輿図説集成』同康廬編(光緒20年上海積山書局石印, 同年上海順成書局石印)

『靈鶴閣叢書』江標輯(光緒21~23年元和江氏湖南使院刊)

『各国日記彙編』万選樓主人輯(光緒22年上海書局石印)

『遊記彙刊』佚名輯(光緒23年湖南新學書局刊)

『西政叢書』求自強齋主人(梁啓超)編(光緒23年慎記書莊石印)

『鉄香室叢刻』(初集・光緒23年, 続集・光緒24年沔陽李世勳鉛印)

これらの叢書類の中にも, 日清戦争以前に書かれた多くの出使日記が収録されており, 李鳳苞の日記体の『使徳日記』は, 『靈鶴閣叢書』と『遊記彙刊』の中でしか見ることができないものである³⁶⁾。以上は, 清末期における出使日記の出版状況であり, この時期に刊行された出使日記の多くは, 第二次世界大戦後に中国大陸や台湾で出版された『近代中国

³⁴⁾ 岡本隆司(2008)第1章「清末出使日記と在外公館」を参照。

³⁵⁾ 王錫祺や『小方壺齋輿地叢鈔』に関する研究には, 吳豊培(1995), 潘光哲(1998), 張維屏(2002)などがあるが, その編纂・刊行の背景にまで踏みこんだ実証的な研究はいまだにない。『小方壺齋輿地叢鈔』には, 光緒27年に完成しその後未刊行のまま旧満鉄大連図書館に所蔵されていた王錫祺輯(2004影印版)・(2005排印版)があるが, 出使日記は収録されていない。また, 王錫祺輯の叢書には『小方壺齋叢書』10帙259種(稿本・10冊, 北京・国家図書館善本室蔵)もあるが, 収録されている出使日記は, 斌椿『乗槎筆記』, 李圭『東行日記』, 郭嵩燾『使西紀程』の3篇のみである。

史料叢刊』(1960s~1970s), 同『続編』(1970s), 『叢書集成新編』(1985), 『叢書集成続編』(1994), 『続修四庫全書』(1995~97), 『中華歴史人物別伝集』(2003), 『歴代日記叢鈔』(2006)などに影印版として収録され, 利用しやすくなっている³⁷⁾。

また, 改革開放後に大陸で刊行された鍾叔河主編『走向世界叢書』(1980~82年湖南人民出版社版, 1984~86年岳麓書社版)は, 清末期に出版された版本のみならず, 多くの未刊行の稿本をも発掘し, それらを底本として各種版本との校合も行った上で標点排印したものであり, 中国大陸はもちろん, 稿本や稀覯本に属する刊本の利用がいまだ困難であった日本など海外における出使日記を利用した研究を促進させるのに大きな役割を果たした。それ以外にも, 清末外交官の個人日記の標点刊行も進められ, 日記の手稿本を底本とした『郭嵩燾日記』(1981~83), 『曾紀沢日記』(1998), 『薛福成日記』(2004)や³⁸⁾, 刊行本を底本とした『張蔭桓日記』(2004)³⁹⁾, 『傅雲龍日記』(2005)などが出版されている。特に手稿本の標点刊行は, 公刊本との比較校合を容易にし, 出使日記を利用した実証研究を更に発展させることに寄与している⁴⁰⁾。

* * *

以上見てきたような史料状況の改善により, 出使日記を利用した実証研究の環境は相当整備されてきたといつてよい。しかし, それを十分に使いこなすためには, それぞれの出使日記の版本情報や他の関連史料(撰者のその他の史料や随員の日記など)の有無などを正確に把握しておく必要があり, 清末外交に関連するものだけでも, その全体像を把握することは決して容易ではない。こうした現状を鑑み, 筆者は現在, 出使日記を中心とした清末外交官僚の史料のデータベース化の作業を進めており, その初稿はすでに完成している(岡

³⁶⁾ 前述のとおり, 『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙所収の『使徳日記』は日記体ではなく, 内容も『靈鶴閣叢書』本や『遊記彙刊』本とは異なる。のちに出版される『使徳日記』のほとんどが『靈鶴閣叢書』本を底本としている。

³⁷⁾ その他, 清末期の官僚あるいは私人によって書かれた日本旅行記・滞在記であるいわゆる「東遊日記」の多くも, 王宝平主編(1999)や同主編(2001~04)によって影印出版されている。

³⁸⁾ 前述したように, 曾紀沢(1998)や薛福成(2004)などは, 手稿本を底本としつつも, 出入りの激しい刊行本との校合作業も行われている。曾紀沢(1998)に関しては, それに不十分なところがあり, その点は別稿「曾紀沢の出使日記について」(未定稿)において詳論するつもりである。

³⁹⁾ 同書には『三洲日記』部分の底本が明記されていないが, 『三洲日記』は稿本が見つかっていないため, 光緒22年粵東新館刻本あるいは光緒32年上海石印本が底本であると思われる。その他同書には, 「出使日記」ではないが, 『甲午日記』と『戊戌日記』が標点収録されており, その底本は手稿本である。

⁴⁰⁾ ただ, 標点刊行されたものには, 単純な誤植から, 手稿本からの文字の読み間違いや標点のミスまで, 少なからぬ誤りがあり, 手稿本との完全な照合が理想であることはいうまでもない。しかし, 現実問題として, 手稿本の入手・閲覧の困難さや手書き文字の判読の問題などを考えると, 標点排印本の刊行は, やはり歓迎されるべきであろう。

本隆司, 2008, 第3章「清末出使日記リスト」)。しかし, すべての学問研究と同様, このデータベース化の作業にも「終わり」はない。これまでもそうであったように, 中国各地の地方の檔案館や清末官僚の子孫が保管している日記や関連史料の発見は今後も続くであろう。そして, すでにリストに記載されている情報にも誤りがないとはいいい切れぬ。研究の基礎となるべきデータベースの作成作業には, 研究者間における不断の相互交流と情報交換が不可欠であることはいうまでもない。筆者も多くの研究者のご示教を乞いたい。

(あおやま はるとし・愛知学院大学大学院研究員)

【引用・参考文献】

FO17 (Great Britain, Foreign Office, Governmental Correspondence : China, 1815-1905)

薛福成 (1898), 『庸盒全集』光緒 24 年涵芬楼刊

張寿鏞等輯 (1903), 『皇朝掌故彙編』光緒 28 年求実書社鉛印

劉錦藻 (1905), 『清朝統文献通考』光緒 31 年劉氏堅匏盒鑄印

Boulger, Demetrius C. (1908), *The life of Sir Halliday Macartney K.C.M.G. : commander of Li Hung Chang's trained force in the Taeping Rebellion, founder of the first Chinese arsenal, for thirty years councillor and secretary to the Chinese Legation in London*, London, J. Lane the Bodley Head.

『奏定出使章程』民国刊, 東京都立中央図書館実藤文庫蔵

沈雲龍主編 (1960 年代), 『近代中国史料叢刊』台北: 文海出版社

曾紀沢 (1965), 『曾惠敏公手写日記』台北: 台湾学生書局

李恩涵 (1966), 『曾紀沢的外交』台北: 中央研究院近代史研究所

沈雲龍主編 (1970 年代), 『近代中国史料統編』台北: 文海出版社

鍾叔河主編 (1980~82), 『走向世界叢書』長沙: 湖南人民出版社

郭嵩燾 (1981~83), 『郭嵩燾日記』楊堅編輯, 長沙: 岳麓書社

坂野正高 (1982), 「張蔭桓著『三洲日記』を読む—清末の一外交家の西洋社会観」『国家学会雑誌』95 - 7・8

鍾叔河主編 (1984~86), 『走向世界叢書』長沙: 岳麓書社

薛福成 (1985), 『出使英法義比四国日記』〔走向世界叢書〕王傑成・馮天亮編輯, 長沙: 岳麓書社

坂野正高 (1985), 『中国近代化と馬建忠』東京: 東京大学出版会

趙金敏 (1985), 「關於張得彝『七述奇』手稿」『近代史研究』1985 - 6

新文豊出版編輯部編 (1985), 『叢書集成新編』台北: 新文豊出版公司

溝口雄三 (1989), 「ある反『洋務』—劉錫鴻の場合」(同『方法としての中国』東京: 東京大学出版会)

陳左高 (1990), 『中国日記史略』上海: 上海翻譯出版公司

鄭孝胥 (1993), 『鄭孝胥日記』中国歴史博物館編, 勞祖德整理, 北京: 中華書局

(1994), 『叢書集成統編』上海: 上海書店出版社

『統修四庫全書』編纂委員会編 (1995~97), 『統修四庫全書』上海: 上海古籍出版社

吳豊培 (1995), 「王錫祺与『小方壺齋輿地叢鈔』及其他」『中国边疆史地研究』1995 - 1

朱維錚 (1996), 「使臣の実録与非実録—晚清的六種使西記」(同『求索真文明—晚清學術史論』上海: 上海古籍出版社)

中国第一歴史檔案館編 (1996), 『光緒宣統兩朝上諭檔』桂林: 廣西師範大学出版社

張德彝 (1997), 『稿本航海述奇彙編』北京: 北京図書館出版社

- 潘光哲 (1998), 「王錫祺 (1855 - 1913) 伝」(郝延平・魏秀梅主編『近世中国之伝統与蛻変—劉広京
院士七十五歳祝寿論文集』上, 台北: 中央研究院近代史研究所)
- 手代木有児 (1998~1999・2002), 「清末初代駐英使節における西洋体験と世界像の変動」1~4, 福島
大学経済学会『商学論集』67 - 1 (1998), 68 - 1・2 (1999), 70 - 3 (2002)
- 丁鳳麟 (1998), 『薛福成評伝』南京: 南京大学出版社
- 曾紀沢 (1998), 『曾紀沢日記』劉志惠点校輯注, 長沙: 岳麓書社
- 夫馬進編 (1999), 『使琉球録解題及び研究 (増訂版)』宜野湾: 榕樹書林
- 楊易 (1999), 「晚清外交官及其著述」『北京檔案史料』1999 - 1
- 王宝平主編 (1999), 『晚清中国人日本考察記集成—教育考察記』杭州: 杭州大学出版社
- 張蔭桓 (1999), 『張蔭桓戊戌日記手稿』王貴忱注釈, マカオ: 尚志書舎
- 佐々木揚 (2000), 『清末中国における日本観と西洋観』東京: 東京大学出版会
- 王宝平主編 (2001~04), 『晚清東遊日記彙編』上海: 上海古籍出版社
- 鍾叔河 (2002), 『從東方到西方—走向世界叢書叙論集』長沙: 岳麓書社
- 張維屏 (2002), 「『四庫全書總目』与『小方壺齋輿地叢鈔』輯録有関東南亜記載の史籍概況的分析」
『中国歴史学会史学集刊』34
- 江慶柏 (2002), 「『隨軼筆記』(手稿)—一部惟一記録目撃巴黎公社起義の中国日記」『南京師範大学
文学院学報』2002 - 1
- 李長林 (2003), 「略議兩部国人巴黎公社目撃記」『南京師範大学文学院学報』2003 - 3
- 夫馬進 (2003), 『燕行録・使朝鮮録を通じて見た中朝相互認識の研究』平成 12~14 年度科学研究費
補助金研究成果報告書
- 国家図書館分館編 (2003), 『中華歴史人物別伝集』北京: 線装書局
- 翁万戈輯 (2003), 『翁同龢文献叢編之六—外交・借款』台北: 藝文印書館
- 梁碧瑩 (2004), 『艱難の外交—晚清中国駐美公使研究』天津: 天津古籍出版社
- 王曉秋・楊紀国 (2004), 『晚清中国人走向世界的一次盛举—一八八七年海外遊歴使研究』大連: 遼寧
師範大学出版社
- 薛福成 (2004), 『薛福成日記』蔡少成整理, 長春: 吉林文史出版社
- 張蔭桓 (2004), 『張蔭桓日記』任青・馬忠文整理, 上海: 上海書店出版社
- 陳左高 (2004), 『歴代日記叢談』上海: 上海画報出版社
- 岡本隆司 (2004), 『属国と自主のあいだ—近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋: 名古屋大学出版会
- 王錫祺輯 (2004), 『小方壺齋輿地叢鈔三補編』杭州: 西泠出版社
—— (2005), 『小方壺齋輿地叢鈔三補編』瀋陽: 遼海書社
- 黄樹生 (2005), 「薛福成著述版本考述」『江南大学学报 (人文社会科学版)』2005 - 1
- 王曉秋 (2005), 『近代中国与日本—互動与影響』北京: 昆侖出版社
(2005), 『曾惠敏公電稿』北京: 全国図書館文献縮微複製中心
- 傅雲龍著, 傅訓成整理 (2005), 『傅雲龍日記』杭州: 浙江古籍出版社
- 李德龍・兪冰主編 (2006), 『歴代日記叢鈔』北京: 学苑出版社
- 兪冰主編 (2006), 『歴代日記叢鈔提要』北京: 学苑出版社
- 岡本隆司 (2006), 「『奉使朝鮮日記』の研究」『京都府立大学学術報告 (人文・社会)』58
—— (2007), 『馬建忠の中国近代』京都: 京都大学学術出版会
—— (2008), 『中国近代外交史の基礎的研究— 19 世紀後半期における出使日記の精査を中心と
して』平成 17~19 年度科学研究費補助金研究成果報告書